
幻夢抄録 目覚め 9章

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻夢抄録 目覚め 9章

【Nコード】

N0899A

【作者名】

維月十夜

【あらすじ】

シヨックから、なんとか立ち直った氷魚。しかし、新たな悲運が、さらに彼女を追い立てていく…

忍び寄る殺気 紫嵐（しらん）

氷魚は、まだ寝ている瑪瑙を、起こさないように部屋を出て行った。間の空いてしまった十日間、氷魚の分の仕事も、瑪瑙はしていたのだろう。

彼は、文句一つ言わなかった。

「さて、と…まずは洗濯洗濯」

井戸の脇に、洗濯物を詰めた籠と盥たらいを置き、氷魚は、水をくみ上げた。

空は青く澄み、冷えた、朝の空気が肌に心地よい。

こんな、当たり前のことを、人として暮らしていた頃は当然、日常にあるべきものと、大して気にも留めていなかった。今、改めてそう実感する。

干した洗濯物が、風になびく。氷魚は、異様な色に変色してしまった、自分の髪を押さえた。

一体、どうしたというのだろうか？この変化は。

そんな時、氷魚は凍ったように、動きを止めた。

あの、いつか自分と瑪瑙の前に現れた、猫の形をした、妖魔の気配だ。

しかも、ひどく殺気だっている。

彼女は身を翻ひるがえし、村の出口への道を走った。

壊してはならない。

瑪瑙の村を、人々の、幸せな日常を。

忍び寄る殺気 紫嵐（しらん） （後書き）

どうも、維月です。

やっとショックから立ち直った氷魚ですが…

悲惨です、また新たな試練が！？

この先、どうなるのかまだ分かりませんが、よろしくお願いしますです。

やさしい罫（前書き）

茨の海で、対峙するひおと、謎の刺客・紫嵐^{しらん}
目に傷を負った紫嵐は、氷魚の前から一時、姿をくらませ、市井に
潜伏した。

やさしい罠

自分は、狙われている！

誰かは分からないが、自分を狙う者がいる！

走って、どのくらい走ったのか分からなくなった頃、氷魚は、足を止めて息を整え、顔をあげた。

そこは、鋭利な棘を持つ茨が茂る、草原だった。

どこなのかは、全く分からない。

けれど、かなり、瑪瑙の村から離れたのは確かだろう。

「ふん、あの邪魔な男も、今はいない。この間の続きといこうか」

「あんた…どうしてあたしを狙う！？」

氷魚は一步、後じさる。

目の前にいるのは子猫だが、油断はできない。

「どうして、ね…訳も知らないで、死ぬんじゃ可哀相だから教えてやるよ。あんたが邪魔なのさ、憎んでいるお方がいる。あたしは、その命令に従っているだけさ」

猫は、ニヤリと顔を歪ませて言った。

「あたしが、邪魔！？」

「そうさ！だから、さっさと終わらせておくれっ」

子猫は一瞬にして、まるで、伏せていた場所から起き上がるようにして、茶色の毛皮をした豹に変わっていた。

それは、間髪入れずに飛びかかってくる。

「くっ！」

氷魚は、背を向けて逃げる、生憎、まわりに武器になりそうな物は、一つも見当たらなかった。

彼女の白い頬に、手足に、無数のかぎ裂きができていく。

（なにが、なにが剣士の血よ！こんな時にこそ、役に立ってくれたっていいじゃないのっ！）

「っ痛！！」

氷魚は転んだ、足に、鋭い痛みが走る。

「もうお終いかい？手間どらせやがって、フン…もう、逃げる力も残ってないってのかい」

氷魚は、じつと豹をにらみ据える。

もう、後戻りはできない、やるしかないのだ。

彼女の中を、急速に、走馬燈が巡っていく。

氷魚は、豹に向かって走り出した。

「なっ！？」

豹は一瞬、身を低くしたが、間に合わなかった。

氷魚は、豹を殴り倒すと、とんぼを切って、離れた場所に着地した。

両者は、じりじりと間合いを狭めながら、対峙する。

「殺される…ここで、死ぬわけにはいかないんだ！」

「貴様ア…よくも顔を剥いたな！」

グルル、と豹が牙を剥いて唸る、身を低くして構え、腕を振り上げ

たのは、両者ほぼ同時だった。

いや、氷魚の方が、数秒か豹を上回っていた。

「うっ！」

氷魚は、豹の、鋭利な爪にはね飛ばされ、茨の上に倒れ込む。

「ぎゃああ　　っ！目がっ、目がああ！？きつ、さまああ…い

つか、いつか絶対に覚えておいで！」

砂嵐を起こし、豹は、一瞬のうちに消えた。

「いた…痛っ、ここ…どこなんだろう」

痛む足を引きずり、氷魚は、茨の原を離れた。

彼女の手足の傷は、すでに、かき裂きと呼べるものではなくなっていた。

彼女の歩いてきた後には、おびただ夥しい血糊が、跡となって続いていた。

「瑪瑙…たすけ、て…誰か、誰、か」

ついに、氷魚は座り込み、彼女の傷だらけの頬を、涙が伝った。

擦り傷だらけの頬に、涙がしみた。

「瑪瑙…」

氷魚は、滑り落ちるように、弧を描いて崩れ伏した。
その脇腹は血で濡れ、止めどなく、彼女の命が流れ出している。
「あたしは、死ぬ、わけにはいかない…まだ、やることもある」
眩しいほどの空の青が、目に、痛かった。

丁度、同時の、とある衙外れ…

「たすけて、助けてください…」

血まみれの、裕福そうな身なりの娘が、道ばたで泣いていた。
目を押さえて、泣いているところに、声をかけた男がいた。

「どうしたね娘さん…ケガをしているのかい？」

「目を…どうか、助けてくださいまし」

「さ、早く掴まって、でも、一体何に!？」

「狼ですわ…赤い狼に襲われて」

「赤い、狼？と、とりあえず、ここからすぐに、私の家があります。
私の家に行きましょう」

「…ありがとうございます」

「いいえ…」

娘を助けた男は、衙はずれに住む医者だった。

「これはひどい…残念ですが、失明していますね」

「そうですか、ありがとうございます…」

「いいえ、命だけでも、助かってよかったですよ…」

「まあ嬉しい、そう言ってくださるのね…なんて優しいお方」

「いや、そんな…」

日が差し込み、彼女の髪を照らす。

茶色の髪は、日に透けて、金色にも見えた。

「あの、お願いを…聞いてはいただけませんか？」

「ええ、もちろん…なんです？」

男が、茶髪の娘に、好意を持ったのは明らかだった。

「あなた、とてもきれいなね、私、きれいな物が好きよ」

「え…あの？」

抱きつかれ、男は慌てる。

「あの、そういうことは…」

「私…欲しい物がありますの」

「なんです？あなたが望むなら、何でも」

「本当？嬉しいわ」

「あ…」

唇を奪われた男の、目の焦点がはずれ、男はがくり、と膝をついた。
「神経毒よ…えぐられても、痛みは感じないの。言ってもムダよね、聞いてないんだもの」

男は、事切れていた。

「まだ温かいうちにね、あんたの目を貰うわ。しばらくは代用で我慢するしかない、バカな男よ…わざわざ声なんかかけなきゃ、死ぬこともなかったろうに。さあて、目も戻った、あの女、今度こそ息の根を止めてやる！」

男の、部屋の窓の隙間から、茶色い毛玉が落ち、それは、小股で歩いて角を曲がる。

しかし、そこに子猫の姿はなかった。

氷魚の意識は、急速に浮上した。

どうやら、自分は走っているようなのだが、ここが、どこなのか分からぬのだ。

ひどく、殺伐とした景色ばかりが過ぎていく。

まわりには、草はおろか、生き物の気配すら、感じられなかった。帰らなければ

帰らなければいけない…瑠璃の元へ。

今の彼女が願うのは、ただ、それだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0899a/>

幻夢抄録 目覚め 9章

2010年10月16日00時08分発行